

平成29年度 日本歯科大学四国地区歯学研修会

「健康こそアンチエイジング」

— 若さを維持する歯科医療とは —



平成 **29** 年 **7** 月 **16** 日

会場：ホテルクレメント徳島

主催：日本歯科大学校友会

日本歯科大学歯学会

四国地区日本歯科大学校友会

日本歯科大学校歌

作詞：木暮 英男／校閲：児玉 花外／作曲：近藤栢次郎／編曲：前田 俊明

お お ぞ ら な が る る あ か つ き の
 か ね の ひ び き に あ け そ む る
 ふ よ う は っ だ の す が た こ そ わ
 れ ら が ぼ こ う の ま も り な れ
 ち は よ し く だ ん ふ じ み は ら な
 は よ し に ほ ん し か だ い が く

大空流るる暁の

鐘の響きに明け初むる

芙蓉八朶の姿こそ

吾等が母校の守りなれ

地はよし九段富士見原

名はよし日本歯科大学

高鳴る血潮の香をのせて

岸打つ文化の波頭

振り立つべき同胞の

甘幸もたらす学徒われ

地はよし新潟浜の浦

名はよし日本歯科大学

今さし出ずる朝日子の

平和と愛との輝きに

照りそそう真紅の光こそ

吾等が母校の使命なれ

地はよし九段富士見原

名はよし日本歯科大学

平成29年度日本歯科大学 四国地区歯学研修会

平成29年7月16日(日)

会場 ホテルクレメント徳島

12:30	受付開始		
	司会	徳島県日本歯科大学校友会副会長	廣田 智治
13:00	開会式		
	開会の辞	徳島県日本歯科大学校友会会長	岡 重徳
	挨拶	日本歯科大学校友会会長	近藤 勝洪
		日本歯科大学歯学会会長	渡邊 文彦
13:20	学長講演		
	「日本歯科大学は、今」		
	日本歯科大学理事長・学長		
		日本歯科大学校友会会頭	中原 泉
	テーマ	「健康こそアンチエイジング」	
		ー 若さを維持する歯科医療とは ー	
	座長	徳島県日本歯科大学校友会学術常任理事	椋本 稔敏
14:00	講演 1		
	「機能回復の総義歯設計」		
		日本歯科大学生命歯学部歯科補綴学第1講座教授	志賀 博
15:15	休憩		
15:30	講演 2		
	「健康維持と増進をはかるインプラント治療」		
		日本歯科大学新潟生命歯学部歯科補綴学第2講座教授	渡邊 文彦
16:45	講演 3		
	「加齢と歯周病:老年歯周病学の落とし穴」		
		日本歯科大学生命歯学部歯周病学講座教授	沼部 幸博
18:00	質疑応答		
18:10	閉会の辞	徳島県日本歯科大学校友会副会長	根東 正樹
18:15	写真撮影		
18:30	懇親会		
	司会	徳島県日本歯科大学校友会専務理事	板東 秀宜
	乾杯	徳島県日本歯科大学校友会前会長	小笠 復夫
20:30	閉会		

学長講演



中原 泉

日本歯科大学理事長・学長
日本歯科大学校友会会頭

「日本歯科大学は、今」

本年、日本歯科大学は創立110周年を迎えました。

この110年目の年に、私どもの日本歯科大学は、社会や
斯界のなかで、どのような立ち位置にいるか。

それは、おのこの先生方の判断と評価に由ります。

私は、先生方が、母校をどのような視点から見ておられる
かを考えながら、先生方から見えにくい、また見落としてい
る母校の一面を知って頂きたいと思います。

そこで本日は、母校の見方について私見を述べさせて頂
きます。

講演 1 機能回復の総義歯設計



志賀 博

日本歯科大学生命歯学部歯科補綴学第1講座 教授

略歴

1979年 3月 同志社大学工学部電子工学科 卒業
1986年 3月 日本歯科大学 卒業 (75回)
1990年 3月 日本歯科大学 大学院 歯学研究科修了 (歯学博士)
1990年 4月 日本歯科大学歯学部 助手
1991年10月 日本歯科大学歯学部 講師
1995年 4月 日本歯科大学歯学部 助教授
2004年 4月 日本歯科大学歯学部 教授

介護を必要とせず自立して生活できる生存期間である健康寿命は、平均寿命との間に約10年もの差があります。そこで、健康寿命を延ばすため多くの試みがなされていますが、厚生労働省の「健康日本21」(第2次:2013~2022年度)では、“健全な口腔機能を生涯にわたり維持することができるよう、疾病予防の観点から、歯周病予防、う蝕予防及び歯の喪失防止に加え、口腔機能の維持及び向上等について設定する”としています。健全な口腔機能を維持するためには、良好に咀嚼できることが求められます。また、健康やQOLに関する国民の意識の向上に伴い、治療効果を客観的に評価し、患者さんに呈示する医療が求められています。

総義歯は、天然歯列とは異なり、義歯床に連結された人工歯列が1つのユニットとして顎堤粘膜に支持され、口腔内に維持されて機能を営みますので、義歯床の安定が最優先条件であり、咬合状態(咬合様式)が主要な役割を担っています。また、義歯を支持する顎堤は、骨吸収が加齢とともに進行するのみならず、義歯の装着年齢や製作回数によっても影響を受け、ほぼ永久的に変化し続けます。したがって、総義歯の咬合は有歯顎の咬合とは異なった対応が必要であり、また機能的な面でも独自の咬合を構築することが可能です。したがって、難症例を含めたすべての症例に適切に対応するためには、臨床応用されている咬合様式の特徴とその選択を知る必要があります。

今回、臨床応用されている主な咬合様式として、Gysiのフルバランスドオクルージョン、Gerberのレデュースドオクルージョン、Poundのリングライズドオクルージョン、Hardy、Jones、Searsのモノプレーンオクルージョンの特徴を整理し、そのあらましを説明させていただくとともに咀嚼機能を回復するために必要な総義歯の設計について、私見を述べさせていただきます。

講演 2 健康維持と増進をはかるインプラント治療



渡邊 文彦

日本歯科大学新潟生命歯学部歯科補綴学第2講座教授

略歴

- 1977年 3月 日本歯科大学歯学部 卒業 (66回)
- 1977年 6月 日本歯科大学新潟歯学部歯科補綴学第2講座 助手
- 1982年 4月 日本歯科大学新潟歯学部歯科補綴学第2講座 講師
- 1985年 8月 米国ミシガン大学歯学部クラウンブリッジ 客員研究員
- 1989年 4月 日本歯科大学新潟歯学部歯科補綴学第2講座 助教授
- 2003年 4月 日本歯科大学新潟歯学部附属病院総合診療科 教授
同 附属病院 副病院長
- 2007年 4月 日本歯科大学新潟生命歯学部歯科補綴学第2講座 主任教授

今日、口腔インプラント治療は口腔、顎顔面領域の欠損修復における機能、審美回復に対する有力な選択肢となっている。また国民の多くの方がインプラントという言葉を知っている。この背景にはインプラント治療術者の臨床評価や、長期間の良好多くの科学的な根拠に基づく臨床報告やインプラントに関する基礎的研究報告と共に日常臨床の中でインプラント治療が根付いてきた点さらに良しにつけ悪しきにつけ、多くのマスコミで取り上げられた点にある。また今日、骨移植、軟組織移植などのティッシュマネージメントの応用によるインプラントの適応症をさらに拡大している。インプラント修復の利点は欠損に隣接する健全歯を切削することなく修復できること、質の高い機能審美回復が可能であること、また長期な良好な予後が期待できる点である。インプラント治療は失われた口腔内の機能を改善し、その結果として全身の健康維持に大きな役割を果たしていることは疑う余地もない。インプラントの予後を評価すると、20年を超える長期の高い残存率の報告もある。日本人の欠損歯数は8020のスローガン、齲蝕予防の点から齲蝕歯数、欠損歯数は減少しているが、先天性欠如や外傷等を含めて欠損修復はなくなることはない。これらの患者の機能を回復することは、当然咀嚼機能の向上を図ると共に、唾液分泌を促し、脳の働きにも影響することが分かってきている。口腔機能は全身の健康に大きくかかわっている。しかし、その一方で長期間インプラントが残存するものの、患者の全身状態に変化がおき、認知症や脳血管障害、代謝疾患などを発症し、在宅医療や介護施設に入居するケースも日本口腔インプラント学会での調査や日常臨床の報告の中でも指摘されてきている。このような患者の口腔管理や、口腔清掃は困難を極めることも稀ではない。口腔清掃の不備は歯の齲蝕、歯周疾患を惹起する。埋入されたインプラントには齲蝕はないものの周囲炎を起こす可能性を増す。

インプラントの支持機構は歯とは異なり、歯は脱落してもインプラント体が残存し、これが対向、無歯顎堤に当たって痛みや、咀嚼困難になるといったケースも報告されてきている。このような点から加齢を考慮したインプラント治療計画立案し、介護化必要となった場合どのようにインプラント治療患者のケアを行えば良いのかが問われ始めている。また在宅が必要となった、介護が必要となったインプラント治療患者によっては上部構造を固定式から可撤式上部構造に変換する、また上部構造、アッバトメントを除去し、インプラント体にカバースクリューを装着し、スリーピングとすることも必要である。インプラント治療は高い機能審美回復が可能であり、患者の満足を得ることができるが加齢に伴った対応もこれらか求められる。インプラント支台の上部構造は加齢により口腔管理や清掃に適したものに可変可能であり、また加齢に応じたインプラント修復を考える必要がある。患者の年齢等にあった治療法である。インプラントの成功の一つの基準は長期間の予後に寄り、口腔の回復を介して全身状態の維持増進であり、また患者がこの世を去る時、インプラント治療を受診して良かったと思えることであるとする。

講演 3 加齢と歯周病：老年歯周病学の落とし穴



沼部 幸博

日本歯科大学生命歯学部歯周病学講座 教授

略歴

1983年 3月 日本歯科大学歯学部 卒業(72回)
1987年 3月 日本歯科大学大学院歯学研究科博士課程 修了
1989年 4月 日本歯科大学歯学部歯周病学教室 講師
1989年 9月 カリフォルニア大学サンフランシスコ校歯学部
客員講師(～1991年1月)
1993年 4月 日本歯科大学歯学部歯周病学教室 助教授
2005年 6月 日本歯科大学歯学部歯周病学講座 教授
2017年 4月 歯学教育支援センター 副センター長

学会活動

日本歯周病学会専門医 (指導医)
日本歯科保存学会専門医(指導医)
日本レーザー歯学会専門医(指導医)
WFLD Certificated of Accreditation

「加齢変化(以下加齢)」と「老化」は区別すべきである。「加齢」は時間経過と共に生じる生体の変化で、出生後から成長発育期の様々な変化も含まれる。一方「老化」は、主に成熟期以降に生じる加齢変化のうち、退行性変化を意味する。退行性変化は病的状態ではあるが、これは「疾病(疾患)」とは異なるものである。

つまり、成熟期以降の加齢変化、すなわち老化では、確かに諸組織の機能低下が生じるが、それは疾病ではない。その状態にさらに疾病という重い因子が加わることで、加齢による退行性変化を大きく上回る問題が諸組織に生じる。

高齢者に生じている様々な歯科疾患の解釈は未だ成人の延長上にある。また、高齢者の老化した口腔機能(健康)の定義もあいまいである。これらをきちんと把握しない限り正確な病態診断はできず、治療が行えても、新たな問題が生じる可能性が高い。なぜならば正常値(所見)と比較してはじめて異常値(所見)と判断できるのである。

歯科領域で老年〇〇学などの用語が生まれているが、それらは成人を高齢者に置き換え、本来成人に対する治療をどのように高齢者に適合させて行うかに主眼が置かれている。しかしこれでは病態の背景にある加齢に伴う特徴的变化を見逃し、異常値(所見)に基づいて診断し、それを正常値(所見)に戻すための治療と言う大切な概念と過程がおざなりにされている感を受ける。何が正常か明確でないのに、治療のゴールは決められない。

歯周組織では加齢と共に歯肉退縮、ステップリングの消失、弾力性の低下が生じる。これらのほとんどは歯周組織を構成する細胞分裂の低下や細胞活性の低下に由来するものだが、これらの加齢変化が若年者と比較して歯周病に対する抵抗性の低下につながるという根拠は示されていない。もとより、高齢者の正常な歯周組織の定義が存在しない。そんな中、若年者と同じ診断基準を適応し、治療計画を立案、実行しているのが現状である。

本講演ではそれらの問題点と対応について解説する。

平成29年度日本歯科大学 四国地区歯学研修会準備委員会

(平成29年5月31日 現在)

準備委員長

渡邊 文彦 日本歯科大学 歯学会 副会長

準備副委員長

小倉 陽子 日本歯科大学校友会 常務理事

國籐 邦彦 高知県日本歯科大学校友会 会長

山下喜世弘 香川県日本歯科大学校友会 会長

石崎 一成 愛媛県日本歯科大学校友会 会長

小笠 復夫 徳島県日本歯科大学校友会 会長

準備委員

岡 重徳 徳島県日本歯科大学校友会 副会長

根東 正樹 徳島県日本歯科大学校友会 副会長

廣田 智治 徳島県日本歯科大学校友会 専務理事

国見 正治 徳島県日本歯科大学校友会 常任理事

椋本 稔敏 徳島県日本歯科大学校友会 常任理事

河野 美樹 徳島県日本歯科大学校友会 常任理事

米沢 武師 徳島県日本歯科大学校友会 理事

原 亮 徳島県日本歯科大学校友会 理事

板東 伸之 徳島県日本歯科大学校友会 理事

三木菜美子 徳島県日本歯科大学校友会 理事

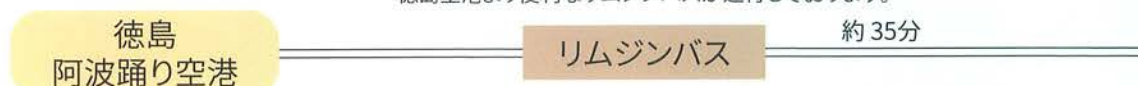
会場案内

JRでお越しの方



飛行機でお越しの方

徳島空港より便利なリムジンバスが運行しております。



お車でお越しの方

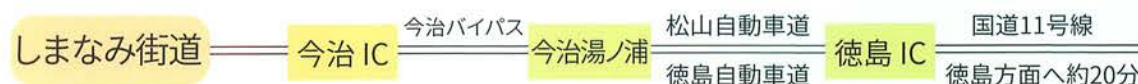
関西方面



岡山方面



広島方面



徳島駅・ホテルクレメント徳島

高速バスでお越しの方

ホテル直結のJR徳島駅より、大阪・三宮・京都・関西空港・東京・名古屋・広島・岡山・高松・松山・高知方面の高速バスがご利用いただけます。



memo

A series of horizontal dotted lines for writing.

